水野　昭さんの急逝を悼む

長　尾　　満*

アジア開発銀行（建設省より出向）の水野昭さんが，飛行機事故のため 48 才の若さで急逝されました．テレビ，新聞でも報道されたとおり，水野さんは USAID の招請によりフィリッピン・ビコール地方アメリカ合衆国援助プロジェクト視察からの帰途，片山日本大使館参事官，合衆国，西ドイツ大使館参事館，USAID 所長，アジア開銀合衆国代理理事と去る9月 13 日午後5時ころチャーター機とともに消息を断ったものであります．その後米比両軍による必死の捜査にもかかわらず行方はようとしてわかりませんでしたが，9月 24 日に至り遭難機およびパイロットを含む8名の遺体が確認されました．マニラ市の北東約 30 km のイリッド山のけわしい斜面に激しいインパクトでぶつかり全員即死に近い状態と思われるむね現地大使館より報告されています．遭難当時マニラ市付近には二つの台風があり，激しい風雨のため機体が流されイリッド山に激突したものと考えられています．水野さんは数多くの海外経験を有し，また建設省の初代の国際協力室長として，アジア開発銀行のかんがい課長として建設関係の国際協力に活躍され，その優れた資質，先見性とによりこれらのわが国の国際協力および海外建設をリードしていく人でしたのに，これも運とはいえ惜しい人を失いました．告別式は現地マニラの日本大使公邸にて片山氏との合同告別式がとり行われた後，東京江東区正源寺において建設省河川局葬および告別式が 10 月9日とり行われました．

水野さんは昭和 26 年東京大学工学部土木工学科を卒業と同時に建設省に入省し，その後河川行政，地域計画国際協力等において持ちまえの能力で数々の優れた実績を残されました．まず建設省入省後の7年間は関東地方建設局において利根川の流量改訂の検討，江戸川下流部の高潮内水対策計画，利根川運河計画を策定するなどその活動は目覚しいものでありました．この間2年半合衆国イリノイ州ミネソタ大学大学院において水文学の研究に携わり，国際的な感覚を身につけられました．

昭和 33 年には建設本省河川局に転任し，全国の河川の調査を担当する一方，水文学に関する研究会を組織し，当時技術的に不十分であった流速計と雨量計を改良し画期的な水文機器を開発し，わが国の水文学の発展に大いに寄与されました．その間フランス政府の給費により半年間フランスに留学，水野さんの語学能力はますます磨かれました．

昭和 36 年末には計画局地域計画課計画官となり東京湾埋立計画，新国際空港建設計画，富士川広域導水計画，首都移転等山積する問題を処理するかたわら，当時あまり顧みられなかった地下水の有効利用に注目し，大和川，芦田川等を対象に地下水貯留の研究を進めたことはその後の地下ダム構想となって実を結んだのであります．水野さんは，このように時代に先がけた数々の業務を遂行

* 正会員 土木学会海外活動委員会委員長 国際協力事業団理事

されたことは氏の見識の高さを示すものであります．

タイ国の日本大使館一等書記官として赴任されたのは昭和 40 年からでした．水野さんはその優れた語学力と国際感覚とによって，ソンクラ道路センターの設立，チャオピア河架橋，ラムドンノイダム，ナムプロムダム，バンコック上水道計画等タイ国に対する幾多の技術経済協力プロジェクトの推進に大きな成果をあげました．特にソンクラ道路センター設立は，数多くの技術者を養成し道路建設による南部タイの開発に大いに寄与するとともに，わが国の建設技術機械の優秀性を強くタイ国政府および国民に印象づけたものであります．また，チャオピア河架橋についても，わが国の技術経済協力により建設されたターチャン橋はバンコック市の交通混雑緩和に大いに役立っています．

タイ国より帰国後，水野さんは建設省河川局河川計画課建設専門官として，河川行政技術の要として手腕をふるわれました．同時に国連エカフエに台風委員会が組織化されるにあたっては水文専門家として出向き，その設立に大いに尽力し，発足後はわが国の技術経済協力ともあわせてフィリピンのパンパンガ河，韓国の漢河，台湾の淡水川等の洪水予警報システムの確立と技術指導等により台風委員会を東南アジアのみならず世界中から賞賛されるまでその名声を高めましたが，その間の水野さんの業績はまことに偉大なものであります．

昭和 46 年 4 月より水野さんは建設省国際協力室の初代室長に就任され，それまでに培われた国際感覚と見識を活用され海外の建設プロジェクトを積極的に推進するなど，開発途上国の発展はもちろん，南北格差の是正という国際協力の命題に正面から取り組み，建設部門の国際協力に多大の貢献をされました．

水野さんは海外協力において全体の援助量の増大とともにインフラストラクチャー整備（経済社会基盤施設整備）が今後の重要な課題として提示されるという援助理念に基づき開発途上国援助におけるグラントエレメント（贈与部分）の比重を高めることに尽力するとともに社会開発部門の協力強化を力説し，これがその後の国際協力事業団の編成時の社会開発協力部の基礎となるなど，水野さんの室長時代，建設部門の技術経済協力は著しく進展しました．

昭和 48 年 10 月から水野さんはアジア開発銀行に建設省より派遣され，アジア諸国の実際に必要な社会施設の建設に自らの身を挺しました．マニラのアジア開銀にあっては，審査第一局に勤務し主として農業開発，水資源開発を中心とする地域総合開発プロジェクトを担当されたが，この分野は同行としても最重要援助項目としていたものです．水野さんがアジ銀（ADB）において直接関与したプロジェクトにはマレーシア・パンテンガラ農村建設プロジェクト，フィリピン・ラグナ湖水資源開発プロジェクト，韓国・洛東江総合開発プロジェクトなどがあります．なかでもラグナ湖水資源開発プロジェクトは水野さんが着任以来担当してきたもので，その努力が実を結んでようやく実現のはこびとなり，同国の発展に大きく貢献するものと期待されています．これらの業務を通じて，わが国の業界の指導にも力を入れられ多大の効果をあげられました．

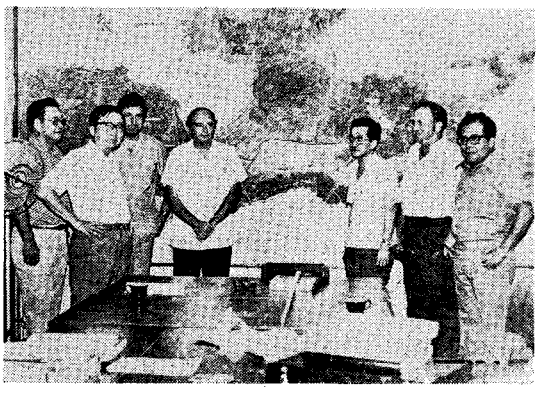
水野さんの豊かな経験と献身的な仕事ぶりはアジア開銀内部でも高く評価され，昭和 51 年 10 月さらに 2 年間の任期の延長を要請され引き続きアジ銀において開発途上国との援助に専念することとなり，昭和 51 年 4 月からは審査第一局のかんがい部の Director の要職に抜擢され，まさにアジア開銀の中枢として活躍中のところ今回の事故に遭遇されたものです．

このように水野さんが国内外において果たした土木技術，土木行政，ならびに国際協力における功績は著しいものでありました．

（1976.10.25・受付）



（1965 年 12 月，マニラ，第 1 回台風委員会）
在タイ大使館書記官時代の水野さん



（1976 年 9 月 13 日，右から 3 人目が水野氏，左から 2 人目が片山参事官）
事故当日，ナガ市 USAID のプロジェクト事務所の水野さん